
霧の街

白羽

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

霧の街

【Nコード】

N6883Z

【作者名】

白羽

【あらすじ】

ONE PIECEと尾田栄一郎先生のデビュー作「WANTED!」のクロスオーバー。オリキャラ有り。

20世紀最後の大晦日に、先生の誕生日記念にと書いていた限定小説。

掲載サイトが閉鎖したためサルベージしました。

「いたぞ、奴だ！」
「撃て！殺せ！！」

ドン！ドン！

鳴り響く銃声の中、1人の男が駆け抜ける。

「しっつこいなあ、もう……」

どうやら若い男のようである。

白いシャツにずだ袋といういでたち。

黒い帽子を目深にかぶり、サングラスをかけているため、顔は見えなかった。

「オレを殺るには百年早いぜ！」

男が呟くが早いか、シャツの下から拳銃が現れた。

ドン！

次の瞬間、銃声と共に敵が1人倒れた。

男がすばやく銃を抜き、撃つたのだ。

腕は相当確かなようだった。

敵の混乱を誘うと、男はあっという間にどこかへ消え去った。

「何処行きやがった！？」

「まだその辺にいるはずだ！」

敵の声が、遠く響いていた……

「霧が、深いな…」

男は近くの街に逃げ込んでいた。

後ろを振り返ると、どうやら追っ手はまいたようだ、

何しろこの深い霧の中では、街の中すら視界がままならない。

男はサングラスを外す。

見た所、どうと言う顔でもない。どこにでもいる普通の男だ。

そんな彼が追っ手から逃れ、顔を隠すのには訳があった。

男の名は、ギル・バスター。

世界でも最高金額の賞金首だった。

キイ…

何とか酒場まで辿り着いたギルは、静かに戸を開けた。

中は薄暗い。

「…？誰もいないのか。」

その時、

「めし~~~~~~~~!!!!」

大絶叫と共に、ギルは前のめりに突き飛ばされた。

「ギャツ！（畜生！追っ手に見つかったか!?）」

酒場のテーブルに頭をしたたか打ちつけながらも、

すばやく体勢を立て直したギルは…
拳銃を向けた相手を見て啞然とする。

子供だった。

いや、身長からして少年というには少し無理がある。
しかし、そのいでたち……

麦わら帽子に赤い上着を素肌に着、すそがボロボロの半ズボンとい
う格好は、

どう見てもまともな大人が着るものではない。

ただ、左頬についた傷と意志の強そうな眼差しが、
彼がただ者ではないことを物語っていた。

「誰？誰かいるの？」

声がする方を見ると、カウンターに女が座っていた。
今まで眠っていたのか、だるそうに目をこすっている。

(…？さっきまで誰もいないと思ってたんだが…)

首をひねるギルを無視し、麦わらの男がカウンターに飛びつく。

「めしっ！！食わせてくれ！」

「ああ、お客さん？久しぶりだね。まだ開店時間じゃないけど、ち
よっと待ってな。」

「すぐ用意するから。…あんたはどうする？」

突然声をかけられ、呆然としていたギルは我に返る。

「……………コーラ……………」

「うめ　　！！ガッ、バクバク…」

隣でひっきりなしに食事を取る（と言うより、口につめこんでいる）男にあきれながらも、ギルは女に聞いた。

「ところで、この街は何て名だ？

霧が深く入り口の文字も読めなかったんだが。」

「ここ？ミラージュタウンよ。つい最近まで栄えてただけど、

今じゃこのとおり、あんたたちが来るまでよそ者は見かけないのよ。

あ、ちなみにあたしはマリアって言うの。よろしくね。」

ふいに、麦わらの男が顔を上げた。

「ふおのはひ、ほんはなふあえなっふえ…」

「口のもんなくしてから喋れよ…」

「んぐっ！おれが来た時、そんな名前じゃなかったぞ。

それに港町だから、おおぜい人もいたし。」

「…ちよつと待った、港町！？ここ砂漠の真ん中だぞ」

「むぐむぐ…」

ギルが声を上げた時には、すでに麦わらの男は食事を再開していた。しかたなく、マリアに向き直る。

「どういうことだ？それに、街に入った時だけ

こんなに霧が深いのも変だと思ってたんだ。」

「それは、あいつの仕業さ。あの、”冥王のキッド”のね。」

「冥王のキッド？」

「化け物さ！」

気がつくど、ギルはいそいそと店を出る準備をしていた。

「じゃ、オレはこのへんで…」

「何だ、逃げるのか？」

妻わらの男が背中越しに話しかけてくる。

「決まってんじゃねエか！面倒に巻き込まれて死ぬ訳にはいかねエだろ。」

オレはとつとこの街を出る。」

「言つとくけど、あいつが撒き散らした霧のせいだ、

一度この街に入った者は出ることができないよ。

あいつを倒さない限りはね。」

「そ、か。ならそいつを倒すまでだ。」

すっぱりと斬り捨てるマリアと呑気な男の発言に、ギルは泣きたくなつた。

その時、ギルの背中に急に悪寒が走つた。

ズン…ズン…と、地響きのような音がする。

「な…何だ？」

「あいつよ！早く隠れて。」

マリアは急いで2人をカウンターに呼び込む。

ズン…ズン…ズン…

どうやら足音らしい。やがてそれは、酒場の前で止まった。

バ
ン！

やかましい音を立てて、扉が破られた。

男が入ってくる。

(で…でか…)

口を押さえながら、隠れていたギルが絶句する。

その男は身長2mを超えていた。

上下同じ虎模様の服に鉄の棒という恐ろしげな姿で、マリアを見下ろしている。

口には笑みを浮かべていたが、対してマリアは睨み付けている。

「よう、マリア。いい加減、俺の女になることは考えてくれたか？」

「誰が！街をこんなにしただけでなく、よそ者まで巻き込んでるあんたを、

あたしは許さないから！」

「相変わらずいい度胸だ。

だが、俺に逆らったらどうなるか、思い知らせてやるのもいいだろうな。」

男が鉄棒を振り上げる。マリアは動かなかった。

「ち……」

ドン！ドン！

たまらずギルが飛び出し、男に向けて撃った。

が、どういう訳か男は倒れない。

「危な……」

ドゴオオッ！！

凄まじい音と共に、鉄棒が振り下ろされた。

しかし、マリアは無事である。

彼女の前に麦わらの男が立ちはだかり、彼が殴られたからである。

「キャアアア！」

「おい、無事か!？」

マリアとギルは倒れた彼を慌てて助け起こすが、彼は何事もなかったかのように頭をかく。

「あ、びつくりした。」

「…な、何で無事なんだよ…かすり傷ひとつついてないぞ…」

啞然とするギルに、後ろから低い声が降ってくる。

「お前ら、見かけない顔だが、よそ者だな。あの霧に入り込んでくる奴は久しぶりだ。」

俺に手を出したからには、ここで死んでもらおうか。」

(み、見つかった…こうなりや、ヤケだ!)

ギルはすばやく銃を男に向けた。

「冥王のキッドとか言ったな。」

大層な名前だが、あんな霧の能力を持っていて街一つを占領するだけなんて、

やってることは意外とセコいんじゃないか?

さっきははずしたが、今度はお前の頭に穴を空けてやるぜ。」

相手を挑発しながら、スキを狙うギルに、男は笑った。

「本当にはずしたと思うか?世界一の賞金首ギル・バスター。」

「!!!?」

いきなり名前を呼ばれて、ギルはあやうく銃を落としかけた。

(そつだ!忘れてたけど、オレ今サングラスはずしてるよ!!)

「賞金首…?」

「すげー！！あいつも賞金首か！！」
きよんとするマリアと、何故かはしゃぐ麦わら。

「俺の名に覚えはないか？」

かつて、殺し屋シノ・フェニックスと1、2を争った賞金首
『キッド・ザ・アウト』を……」

「何iiiiiiii!?!」

ギルは今度こそ銃を取り落とした。

(キッド・ザ・アウトと言えば、確かに腕利きのギャングだった！
でも、確か死んだって聞いたぞ……)

「危ない！」

マリアの声に気がついたが、もう遅かった。

ギルは鉄棒の餌食に……

ならなかった。

麦わらがギルを突き飛ばし、またも頭で鉄棒を受け止める。

「お前……」

「ゴムゴムのおおお……」

鉄棒を頭にめりこませたまま、麦わらは両腕を後ろに伸ばし……

何と、腕がモチのように、にゅ　　と伸びた。

「ッギヤ　　！腕が!?!こいつも化け物か!?!」

「まさか……悪魔の」

「バズ　　カ!?!」

掛け声と共に、急激に戻ってきた手がキッドをふっ飛ばした。

「ははははは！やった！！」

「おめー一体何者なんだよ！？攻撃受けても傷一つつかないし、腕は伸びるし…あいつと同じ化け物か！？」

「おれはゴムゴムの実を食ったゴム人間だ。」

「ゴムゴム…？何だそりゃ。」

麦わらの話によると、どうやら悪魔の能力が得られるアイテムらしい。

まさしく、人を化け物に変える実だった。

「あんた、悪魔の実の能力者だったんだ。キッドと同じ。」

マリアがこちらに駆け寄ってくる。

「あいつも何かの能力があるって？」

でもキッド・ザ・アウトは死んだはず…」

「ええ。奴は『キリキリの実』を食べたの。」

でもそれは、死んでからじゃないと効果が現れないのよ。

あたしたちがこんなことになったのも、奴が亡霊になったことから始まったの。

…ぐずぐずしてたら、あいつが戻ってくるわ。

向こうに宿屋があるから、そこへ行きましょ。

支配人にはあたしが事情を説明するから。」

マリアは2人を案内する。

その途中、麦わらの男がギルに話しかけてくる。

「お前、あいつを倒すのか？」

「最初は嫌だったけどな、ここまで来たらしょうがないだろ！」

それに、話を聞けばあいつを倒す手だてが見つかるかもしれない！」

「うししし！それもそうだな！」

「ところでお前、何て名だ？オレのはさっき聞いただろ。」

麦わらの男は、にやりと不敵な笑みを浮かべた。

「おれはモンキー・D・ルフィだ！」

「ところでさっき夢中でめし食ったけど、

おれ金持ってなかったんだ。お前持ってないか？」

「何でオレに聞くんだよ！」

「お金はいいから、2人とも急いで！」

* * * * *
* * * * *

「マリアちゃん！無事だったか。」

「大変だっただろ。」

「みんな！集まってたの？」

宿屋には、支配人だけでなく、何人かの人間がいた。どうやら、町長・保安官といった街の代表らしい。

「キッド・ザ・アウトが死んだのは確かだ……」

町長がぼつりと話し始めた。

「だが、奴はすでにキリキリの実を食っていた。」

「キリキリの実の能力って一体なんだ？」

「マリアの話じゃ死んでから効果が現れるって…」

「ギルの問いに、保安官もうなずく。」

「キリキリの実は、死後、自らの魂をこの世にとどめ、霧でできた仮そめの体を手に入れることができる。」

「仮そめと言っても体があることには違いない。ゾンビと一緒にだよ。」

「それより町長！この街に何が起きているか知ってもらわなきゃ！」
「マリアが口をはさむ。」

「あいつがミラージタウンにやってきたのは、1年前のことよ。」

「奴はこの街を霧で囲み、あたしたちを出られなくしたばかりか、迷いこんでくるよそ者を殺して、霧の一部にしてしまうの。」

「そうしてあいつはどんどん強くなっていったわ。」

「でも何でそいつ、この街にこだわるんだ？」

「首を傾げるルフィに、ギルが言った。」

「さっき見てたが、どうやらキッドはマリアを自分の女にしたいんだな。」

「マリアがいい返事を出さないんで、こっちは街ごと飼い殺しの状態にして追いつめてるんだ。」

「そう、あたしのせいなのよ。」

「だから、本当は大人しく言うことを聞けばいいんだけど…」

「何を言う、マリアちゃん！」

保安官が声を上げる。

「あいつがそんなことで我々を解放すると思うか!?
増長して被害が広がるだけだ!絶対にいけない!」

「幸い、奴の弱点になるものを用意してある。」

支配人が引き出しから何かを取り出した。

ギルが思わず身を乗り出す。

「何だ、あるんなら使えばいいのに。」

それは、弾丸のようだった。

「ビーンズショットと言う…今まで色々な方法で奴に対抗してきた
中で、

効きそうなものを集めて開発しておいたものだ。

今は材料も使い果たし、これ1発だけだ。

だが、これも霧でできている奴には効かない…

狙うなら、奴が食った悪魔の実だ。」

「キリキリの実を!？」

「今のキッドの体は思念で作られたものだ。

能力を使う時、体のどこかに悪魔の実のイメージが現れる。

以前、奴の体が一瞬光るのを見たことがある。

それを狙ったんだが、鉄棒で弾き返されてしまったのだ。

当てるにはかなりの狙撃の腕と、鉄棒を使えなくする必要がある。」

「よおし!その役はおれがやる。めしも食わせてもらったしな!」

自信満々で言うルフィ。ギルもうなずく。

「オレはキッドと肩を並べる殺し屋シノをしとめたことがある。靈感だつて人並み以上ある。やれるはずだ。」

ドオオオオン…

建物が破壊される音が響いた。

キッドがこつちに向かっている。

「行くぞ！」

ルフィが引き付け、ギルが撃つ作戦である。

しかし、キッドの体が光るといふ保証はない。もし光らなかつたら…もしはずしたら…

そこで終わる。

(死んでたまるか…)

ギルは銃を握り締める。

ルフィがキッドに突っ込んでいった。

「ゴムゴムの銃！」

伸びた腕がキッドを直撃する。

が、まるで効いていない。

「鉄棒だ！ルフィ！！」

ギルの声に、ルフィが鉄棒に飛びつく。

「俺の鉄棒を奪い、能力を使わせる気だな。
と言うことは、ギルはビーンズショットを持っているのか。」

キッドはルフィを振り落とそうと、鉄棒を振り回す。
ルフィはしがみついたまま、首を伸ばした。

「ゴムゴムのおおお…鐘　　！！」

ルフィの頭がそのまま鉄棒に激突する。

「はずしたな！」

笑うキッドに構わず、再びゴムゴムの鐘を繰り出す。

ゴ　　ン…

妙な音がして、ルフィは転げ落ちた。

「吹っ飛べ！！」

キッドの一閃がルフィを襲う。

その時、バキツという音と共に、鉄棒が真っ二つになった。

「しししし！鉄棒にヒビ入れてやったぞ！」

ガッツポーズをとるルフィに、ギルはあきれた。

「あいつ…ゴムじゃなくて石人間じゃないのか？」

「小僧…調子にのるなよ…」
キッドの声のトーンがさらに低くなったと思うと、体がもやにっつまれ始める。

「あっ、ローグタウンのおっさんの技に似てる!?!」
ルフィは慌てて飛びのこうとして、仰天した。
彼の体ももやにっつまれ、消えようとしている。

「ぎゃ　　…!!体が!消える!!!」

焦りまくるルフィに、ギルも動揺し始めていた。

(早くしないと、あいつが霧になっちまう!でも、まだ光らない…
どうする!?!)

その時、彼の頭に聞き覚えのある声が響いた。

「どうした、ギル。こんなことで何焦ってた。
このままじゃお前、自分の命どころかあいつを見殺しにすることになるぞ」

(ワイルド・ジョーか!?!何で…成仏したはずじゃ…)

それは、かつてギルを狙っていた賞金稼ぎだった。
ギルに殺され、恨むあまりに化けて出たことがあったが、
ギルの強さを見せ付けられ、ふいに消えていった。
成仏したものだと思っていたが…

「けっ!お前があまりにも情けないから、笑いに来てやったんだ。

この分だとあの時の勝負、負けを認める訳にはいかねエ。せいぜい脅えながら死にな！はっはっはっはっは…」

この言葉に、ギルはカチンときた。

「うるせ　　！誰が脅えてるって！？」

このバカ、しつかり見てろよ！」

ギルは銃を構え直すと、キッドに突進していった。

「くら　　！くそキッド！！こつち向け　　！！」

ばかでかいギルの声に振り向いたキッドはにやりと笑い、霧をこちらに向けて吹きかけてきた。

キッドの腹の奥で何かがキラリと光る。

「そこだ　　！！」
ドン！

1発の銃声が鳴り響き、ギルは倒れる。

そこには、霧の量がさらに多くなったキッドが立っていた。

ギルは片腕ごと拳銃を霧にされかけ、狙いはずしただった。

「はずしたな、俺の勝ちだ。ギル！」

キッドの勝ち誇った声が響き渡り、ギルの体を霧がつつみこんだその時、

ドオン！

もう1発の銃声が鳴り、ギルが起き上がる。
反対の手でもう1丁の銃が煙を上げている。

「百年後に…出直して来やがれ…」

キッドの体中がキラキラと光り、やがて風が吹くとまわりの霧と共に消えた。

ルフィが起き上がり、消えかけていた手を眺め回している。

「あいつが消えたら、元に戻っただろ。」

「お前、最初はずしてたな。もう1個あの銃弾持ってたのか？」

「そんな訳ねエだろ！あれは普通の銃弾だよ。」

あれで奴の油断を誘ってから本物を撃つたんだ。」

「あ、あれ！」

「どうした、ルフィ！！！」

「おれ、また消えてる！」

「何ー！？」

「どうしよう、ギル！体が…消え…」

「ルフィ …！！」

完全に消えてしまったルフィに呆然としてみると、マリアが走りよってきた。

「大丈夫、彼は元の場所に戻ったのよ。
キッドが倒され、ミラージユタウンも解放されたわ。
ありがとう…本当はルフィにも言いたかったんだけど。」

「あいつが戻った場所って…お前たちの墓がある場所か？」
「！！！」

「言っただろ、オレは靈感あるって。お前たちが生きてるかどうかが
くらい分かるんだ。」

このミラージユタウンも、キッドが作った屋敷楼なんだな。」

ギルの問いに、マリアは小さくうなずく。

「ええ。本当は、キッドがこの街に来た日に全員殺されていたの。
でも、死んだ後もあたしたちは苦しめられ続けた。」

あいつ、自分だけでなく他人の魂もとどめることができるから…
こんな仮そめの体を与えられて、ずっと玩具にされてきたんだわ…」

「キッドは霧でできた鎖だったんだな。」

でももう霧は晴れたし、地上に縛り付けるものはないんだ。」

「これでやっと天国へ行けそう。あなたたちには感謝するわ。」

マリアが微笑むと、ギルもにやつと笑う。

「礼なら、あのバカに言ってやってくれよ。」

「バカ？」

「さっきおせっかいに現れた、あんたたちの同業者だよ。」

あのワールドの声は、本物だったのか、幻聴だったのか。

ギルにとってはどっちでもよかった。

やがて、マリアもミラージュタウンも消え失せると、そこはただの砂漠が広がっていた。

ギルは帽子をかぶり、サングラスをかける。

「百年後…あの世でな。」

今はもうない塵気楼と、どこかにいるはずの麦わらの男にそう呟く。

遠くで、砂ぼこりが舞いあがった。

よく見ると、賞金稼ぎらしき人物がこちらに向かっている。

「…!!やべ〜〜〜」

ギルはズダ袋を背負うと、一目散に駆け出した。

「THE END」

(後書き)

劇場版第1作目のED見て思いつきアップしたものです。

10年以上前なので、オリジナル設定の微妙な被り具合は偶然ですマジで。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6883z/>

霧の街

2011年12月23日01時49分発行